

令和3年度(2021年度)
京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程入学試験問題
語学(日本音楽研究専攻・英語)

下の文章は、九州の肥後琵琶という語り物の伝承にかんする研究書(Hugh de Ferranti, 2009. *The Last Biwa Singer*, Ithaca, NY: East Asia Program, Cornell University)から引いた文章です。よく読んで問いに答えてください。

この問題は著作権法上の関係により、出典のみを記載しています。

1, 第一段落において著者は、「語り物」を、広い意味と狭い意味にわけて説明しています。著者は、両者をどのように区別しているか、くわしく説明してください。

2, 第一段落の下線部”history”に引用符が付いているのはなぜですか? 理由を説明してください。

3, 第二段落で下線を付した部分は、長いですが、ひとつのセンテンスです。このセンテンスの、主語を下に書き写し、さらに訳してください。

4, 琵琶法師は、日本の語り物の歴史上でどのように位置づけられると、著者は述べていますか?

左の文はある伝書の一部です。あとの設問に答えなさい。

知二習道一事

至りたる上手の能をば、師によく習ひては似すべし。習はでは似すべからず。上手は、はや極め覺え終りて、さて、安き位に至風體の、見る人のため面白きを、唯面白とばかり心得て、初心是を似すれば、似せたりとは見ゆれ共、面白き感なし。上手は、はや、年來、心も身も十分に習ひ至過て、さて、動七分身に身を惜しみて、安くする所を、初心の人、習もせで似すれば、心も身も七分になる也。さるほどにつまる也。

然者、習ふ時には、師は、我が當時する様には教えずして、初心なりし時のやうに、弟子を、身も心も十分に教うる也。教へすまして後、次第く上手になる所にて、安き位に成て、身を少々と惜しめば、をのづから身七分動になる也。

そうじて、安き位を似する道理あるべからず。似せば「大事」なるべし。「大事」なる所は、せめて似すべき便りもあるべし。「似たる事は似たれ共、是なる事は是ならず」と云へり。此「是」に似するあてがひあるべしや。大安不二。口傳有。

一、師となり、弟子になる事、大かたを習う事は、常の事なれ共、師の許す位は、弟子の下地と心を見すましてならでは、許さぬ子細あり。下地おろそかなれば、許す事かなはず。そのゆへは、おろそかなるを許せば、許す位は高上なり、下地は及ばねば、相應せぬによてかなはず。かなはねば、許す事偽りに成て、いたづらになるゆへに、許さぬ也（制注）。抑、その物に成る事、「三」そろはねばかなはず。下地のかなぶべき器量、一。心に好きありて、此道に一行三昧になるべき心、一。又、此道を教ふべき師、一也。此「三」そろはねば、その物にはなるまじき也。其物と者上手の位に至て、師と許さるゝ位なり。

又、當時の若為手の藝態風を見るに、轉讀になる事あり。是も又、習はで似するゆへなり。二曲より三體に入て、年來稽古ありて、次第連續に習道あらば、いづれも得手に入て、づゝの藝風になるべき事なるを、只似せ學びて、一旦の事をなすゆへに、轉讀になるかと覺えたり。（中略）若、年若き為手の、達者にまぎれて、轉讀なりとも、一旦の花あるべし。それは、年行かば、能は下るべし。もし下らずとも、名人になる事、返々あるべからず。心得べし。

『日本古典文学大系』65「西尾実校注」より引用、改変

- ① 正しい稽古法を知ること ② 極めて上手い名人が演じる能を ③ 稽古したうえで真似すべきである
 ④ 修行の末に到達する難しい芸をやすやすと演じられるほどのレベル
 ⑤ 名人の芸に似ているように見えても ⑥ 長い年月、長年 ⑦ ゆきづまる
 ⑧ 師は弟子に、その時分の自身の演じ方通りには教えないで、
 もし上手な人の芸を真似するとしたら、それは「安き位」ではなく「大事（大切に技巧的に困難なところ）」であろう
 ⑨ 「安き位」よりは）まだ真似することができるとは手がかかりもあるだろう
 ⑩ 当時のことわざ。⑪ このことわざの「是」のように、「安い位」の芸に似せる方法などあるだろうか（ありはしない）。
 ⑬ 「大事」と「安い位」は「不二」（別々のことのようにあるが、じつは表裏一体）である
 ⑭ この著者の論書では、箇条書きに項目をならべて書いてはいけない箇所に、あえて「一」と書き出す例が時々みられる。
 ⑮ 師が弟子に印可（免許）を与える際には ⑯ 素質 ⑰ 事情や理由
 ⑱ 釣り合わないから印可を与えられない ⑲ 「師の許す位」になること ⑳ 心から好んでこの道に専念精進する心
 そういった者というのが上手のレベルに到って師匠として許されるのである ㉑ 芸風、芸のありさま
 ㉒ 同人物の伝書『至花道』に「二曲と申は舞歌なり。三體と申は物まねの人體也」とある。舞歌とは、舞と謡で能の基礎
 となる二要素。物まねの人體とは、老体・女性・軍体をいい、物まねの基礎とする。『至花道』では、まず二曲をよく習
 い極めて元服するのに三體を習い極めるべきだと説く。
 ㉔ 年齢に応じた稽古法をふんで、順序をおって休まず稽古すれば
 ㉕ 一つ一つの技をすべて体得した芸風（解釈には諸説あり）
 ㉖ ひよつとすると歳若い役者が（表面的に）上手にみえることに人々がだまされて、実際は「轉讀」であつても一時的に
 面白くみえる場合もあるだろう。

問一 この文の著者と書名を次からそれぞれ選びなさい。（番号にて回答しなさい）

- 著者 ① 大森宗勲（一五七〇～一六二五） ② 世阿弥（一三六三？～一四四三）
 ③ 伯朝葛（一二四七～一三三三） ④ 河竹黙阿弥（一八一六～一八九三）
 ⑤ 「初世」市川團十郎（一六六〇～一七〇四）

- 書名 ① 『月下記』 ② 『花鏡』 ③ 『糸竹初心集』 ④ 『古来風体抄』 ⑤ 『続教訓抄』

問二 第一段落、第二段落において、理想的な「心」と「身」の使い方をどのように説いているか？

問三 師（弟子をとって教える立場）となるには三つの素質（素養）が備わっていないなければならないと説か
 れているが、三点それぞれを説明しなさい。

問四 傍線部「轉讀（転読）」の一般的な意味は「經典の読誦において本文を省略し経題のみや經典のなかの
 初め、中、終わりなどの要所のみを読むこと」によって、全体を読んだことに代える「意味であるが、
 「ここではどのような喩えとして使われているか？」

問五 この文に説かれている稽古法や教授法の特徴や時代性などについて自由に論じなさい。

令和3年度（2021年度）

京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程入学試験問題

日本音楽研究専攻 小論文

* 回答順は自由。回答用紙に問題番号を付して回答してください。

問1) 日本における「がいらいおんがくぶんか外来音楽文化」のじゆよう受容について、以下のじこ事項
の1つ以上にふれて論じてください。

しやみせん三味線 きんがく琴学 べーとーヴェンベートーヴェン こうきやうきよく第9交響曲

おらしよおらしよ やまだこうさく山田耕筰 みんがく しんがく明楽 清楽 ぶつきやう仏教

ぐんがくたい軍楽隊 ががく雅楽 びーとるずビートルズ れいがくしそ礼楽思想

問2) あなたの「けんきゆうほうほう研究方法・しゆほう手法」について、あなたのけんきゆうたいしやう研究対象に
そく則して述べてください。